

自閉スペクトラム症の女性が行うカモフラージュ行動の傾向と動機に関する研究の現状と課題

出水 友理亜 お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科
石丸 径一郎 お茶の水女子大学基幹研究院

要約

ASD をもつ女性が行うとされる行動の 1 つにカモフラージュがある。このカモフラージュについて対象の人や状況、カモフラージュを行う動機、カモフラージュによって起こる精神的負担について 24 本の論文から研究の動向を調査した。その結果、カモフラージュは女性のほうが多く行い、親しい人と関わる場合はより起こりにくく、オンラインよりもオフラインでカモフラージュ行動が行われやすいことが明らかになった。また、集団から浮きたくないといった同調意識や、周囲からの圧力や性役割期待等ネガティブな動機から行われることが多い一方、友達を作りたいというポジティブな動機もみられた。更に、カモフラージュを成功させるためにプレッシャーを自分自身にかけたり、カモフラージュをすることで孤立感が高まるといった精神的負担も見られた。これらを踏まえて、カモフラージュを行う ASD の女性に対しては本当の自分が出せるような場や関係を提供する必要があることが示唆された。

キー・ワード：自閉スペクトラム症 (ASD) , 女性, カモフラージュ

I はじめに

近年自閉スペクトラム症 (autism spectrum disorder : ASD) は、男女によって症状の現れ方に差異がみられると考えられている。その 1 つとして、ASD の女性で知的障害を伴わない場合は、男性と比較して同程度の症状であっても女性は男性に比べて ASD の特性が行動面に現れにくく、周囲から気づかれづらいことが指摘されている (山内他, 2013)。自閉的特性が見えにくくなっていく要因として、自身の自閉的特性を隠すことで適応しようとする「カモフラージュ」という概念が提唱されている。

現在 ASD の男女比が 4:1 で男性が多いと言われているが (Centers for Disease Control and

Prevention, 2014)、既存の診断基準は男性に見られる症状がベースであるため、ASD の女性が自閉的特性をカモフラージュし、行動面が見えづらくなっている結果 ASD の女性が見逃されている可能性が考えられる。このことから、現在想定されているより ASD の女性は多く存在していると考えられている。

神尾他 (2013) は未診断あるいは診断が遅れることで、不安やストレスを感じ、非 ASD の人と比較してうつや不安など精神医学的問題を持つリスクが高くなることが明らかにしている。さらに、症状が軽微であることから受診に至ったとしても誤診される場合もあり、不適切な治療から苦しむこともあると指摘している。

これらの理由から、ASDの女性の症状が見えにくい要因と考えられているカムフラージュの特徴や傾向を明らかにし、早期に発見と診断、さらに援助につなげる必要がある。そこで本稿では、どのような要因からカムフラージュの使用につながっているのかについて、人、場面、動機に分けた上で検討する。さらにカムフラージュを行うことによってどのような課題が存在するのかについてこれまでの研究動向の整理と検討を行う。

II 調査方法

文献検索を行うデータベースとしてPubMedを使用した。検索のキーワードは、自閉スペクトラム症についてはautismとasdを用い、女性にはwoman, women, femaleの3種類を用い、「(“autism” OR “asd”) AND (“woman” OR “women” OR “female”) AND camouflage」とした。さらに検索結果のうち(1) ASDに焦点を当てていない、(2)カムフラージュに焦点を当てていない(3) ASD当事者を対象としていない(4) 英語以外の言語を使用している(5) レビュー文献および概説に関しては除外した。なお、出版年については条件を設けなかった。その結果、該当する文献の合計件数は24件であった。

III 結果

1. カムフラージュについて

カムフラージュ (social camouflage) は、誰かをそっくりになめた表情やしぐさをしたり、自然なフレーズを丸暗記して使用したり、自分の意思より相手の喜ぶ言動をとることで社会的に受け入れられるように努力することで(蜂谷, 2020; Hull et al., 2017), 「補償」「マスキング」「同化」の3つの要素があるとされる。「補償」とは、自閉症に伴う社会的、コミュニケーションの困難を回避する方法を見つけることで、他者が話した言葉をそのままそっくりまねて話すことなどが挙げられる。「マスキング」は自閉症的な側面を隠し、

非自閉症的な人格を見せることを指し、例えば、自然にではなく意識的に目や鼻先を見て相手の話を聞いているようにふるまうことが挙げられる。

「同化」は本人が不快だと感じている状況に対して、その不快感を表に出さずにその場に溶け込もうとすることを指す(Hull et al., 2017; Hull et al., 2019)。

カムフラージュの量的な測定方法としては、3種類あげられる。1つ目は自閉症スペクトラム指数 (Autism-Spectrum Quotient : AQ) (Baron-Cohen et al., 2001)等の自己記入式のアンケートと自閉症特性を測る検査である自閉症診断観察検査 (Autism Diagnostic Observation Schedule : ADOS) (Rutter, et al., 2012)等の専門家の観察による客観的な行動とを比較し、その不一致の程度をみることである(Lai et al., 2016)。例えば、Rynkiewicz et al. (2016)では、5歳から10歳の男女に対して、児童用のAQとADOS-2を使用してそのギャップを測定している。その結果、男子より女子のほうが非言語的コミュニケーションをとっていることが明らかになっている。このような研究がある一方で、この方法では内的な自閉症傾向の測定方法がAQ等の使用する尺度の信頼性に依存しているため、正確に測定できているとは限らない。また、カムフラージュを試みて失敗している例については測定することが不可能であることも課題として挙げられる(Hull et al., 2019)。

2つ目は、ASDの人の特定の行動を観察することでカムフラージュ行動を測定する方法である。この方法でのメリットはカムフラージュが行われる場面を明確にすることができること、カムフラージュの具体的な行動や成功した場合を把握することができる点である。例えば、Cola et al (2020)では、ASDの参加者に知らない人と5分間会話をしてもらい、その様子を専門家が評価をすることによって、社会的コミュニケーション能力を男女で比較している。その結果、女子のほうが社会的

コミュニケーション能力が高いという評価が得られた。ただし、この方法においては、非自閉症である観察者の判断によってカムフラージュであるかどうか判断されてしまう点が問題となる (Hull et al., 2019)。

3つ目は Hull et al. (2019) が開発したカムフラージュ尺度 (Camouflaging Autistic Traits Questionnaire : CAT-Q) による測定である。これは、3つのサブスケールから構成されている25項目の自己記入式の尺度である。なお、日本語版は現在未出版のため、今後日本語版の作成及び使用が期待される。

2. カムフラージュにおける男女差

カムフラージュを行う予測因子として、まず男女差が考えられる。先行研究では ASD の男性よりも ASD の女性のほうがカムフラージュを多く行っているという報告がなされている

(Rynkiewicz. et al., 2016 ; Lai, et al. 2017 ; McQuaid et al. 2021 ; Wood-Downie. et al., 2021)。CAT-Q を用いた調査では、非自閉症群においてはカムフラージュの程度に性差がみられなかったが、自閉症群では男性よりも女性のほうが CAT-Q 得点が高く、男性よりも女性のほうがカムフラージュを行っていることが示唆されている (Hull et al., 2019)。

近年では、ASD において女性だけでなく男性もカムフラージュをしていることが明らかになっているが、カムフラージュを行う頻度や時間、場面は女性のほうが多い (Cassidy, 2018)。

また Parish-Morris et al. (2017) は、会話におけるカムフラージュについて研究を行った。彼らの研究によると、英語で会話を一時中断する時に使う間投詞である“UM”や“UH”の使用方法について学齢期における性差を分析することにより社会的なスキルを測定し言語的なカムフラージュを明らかにしようとしている。“UM”も“UH”も会話の途中で一時的に中断する機能を持つが、“UM”

のほうがより長く中断することから高度なコミュニケーションに関係しているという。結果、ASD の女子と非 ASD の健常者の男女は“UM”の使用率が ASD の男子よりも高かったのに対し、ASD かどうかは関係なく女子は男子よりも“UH”の頻度が少なかった。このことから、“UM”を使用する割合が高い ASD の女子のほうが、意図的かそうでないかにかかわらず ASD の男子よりも一般的な集団に馴染んでいるように見える可能性が示唆されている。

3. カムフラージュと認知機能

カムフラージュ行動を予測する要素として認知機能を挙げている研究もあった。

1つ目は実行機能 (Executive Function : EF) との関連である。EF とは、状況に応じた柔軟な対応や自身の行動を認識し抑制するなどの高レベルの認知制御機能のことを指す。心の理論の成績と ADOS の成績で4群に分けて EF を比較した結果、心の理論が悪く ADOS の成績が良い群は EF が良好であった。このことから、EF は心の理論の困難さを補うプロセスに関係している可能性がある (Livingston, et al. 2019)。さらに、CAT-Q を使った研究では下位項目の「補償」と EF に相関があるという結果が報告されている (Hull et al., 2021)。

また、カムフラージュを行うかどうかの要因として IQ の違いについて検討した研究もあった。男女ともに診断基準に従って同程度の ASD と診断された若者 228 名について、自閉症特性を測る検査である ADOS と ADI-R (Rutter et al., 1994) の結果と親が報告した自閉症の特徴や適応スキルについて比較したところ、IQ が高い女性は ADI-R の基準を満たす確率が低い一方で親が報告した適応スキルは男性より低いと報告された。ただし、親の評価については息子に対する社会的スキルの期待値より娘に対する期待値のほうが高いことから、より女性のほうが評価が低くなって

いる可能性があるとし唆されている (Ratto, 2018)。また、ほかにも年齢、IQ とカモフラージュ行動の頻度は相関しない (Lai et al., 2017; Hull, et al., 2021) とする研究があった。

4. カモフラージュが起こりやすい状況

モフラージュが行われる要因として、先に述べたような個人要因だけでなく環境要因も考えられる。Jedrzejska & Dewey (2021) によると、ASD の人と非 ASD の若者にカモフラージュの程度とソーシャルメディアの利用率を質問紙で確認したうえで半構造化面接を行った結果、ASD の女性と男性の両方ともオンラインよりもオフラインでカモフラージュを行っており、オフラインのほうがカモフラージュが起きやすいという。

一方、カモフラージュが起きにくい状況としては、親しい友人や家族と一緒に過ごしている時があげられる (Hull et al., 2017)。Halsall (2021) は年齢の平均 13 歳 7 か月の女子 8 人に対して、本人と教師と親に半構造化インタビューを行った結果、4 つのテーマと 13 のサブテーマが特定された。そのうちの 1 つのサブテーマでは、自宅ではカモフラージュをする必要性が少なく、学校で友達と一緒にいる時だけカモフラージュをしていると報告された。

5. カモフラージュ行動の動機について

カモフラージュ行動を行う ASD の人がもつ動機については、個人要因と環境要因とが考えられる。

1) 個人要因

個人要因としては、まず定型発達の集団の中で目立ちたくない、孤立したくない等といった対人関係において否定的な経験を回避しようとする動機が挙げられる。さらに、ASD の症状によって社会的に自身の能力が低いと見られることを避けたい、仕事を滞りなく行いたいといった仕事や教育の場で他人の自分に対する印象を操作する方法と

してカモフラージュを行っている人がいる (Hull et al., 2017; Bernardin et al., 2021)。

一方ポジティブな動機からカモフラージュを行っている場合もある。例えば、友達と仲良くなり、他人とのつながりや関係を増やしたいという動機がある。この場合、ASD の人はカモフラージュを自閉的特性による対人スキルの不足をカバーするために行う。また、関係のある程度構築した後には、自身の特性を開示しやすく、また相手も受け止めやすくなるため、人間関係の初期にだけカモフラージュを行う人もいる (Hull et al., 2017; Bernardin et al., 2021)。

2) 環境要因

カモフラージュを行う環境的要因としては、文化に基づいた性役割期待が考えられる。職場や学校で女性が女性的にふるまうことが期待されていることから、ASD の女性はカモフラージュが必要だと感じ、使用している可能性がある。また、カモフラージュを意図的に行うのではなく、社会的な状況で意識をすることなく習慣的にカモフラージュを行っている可能性がある (Cage et al., 2019)。

また、集団におけるいじめや幼いころからの同調圧力のプレッシャーが存在していたことも要因として考えられる。同調圧力によるプレッシャーは家族や友人等仲が良い人という時よりも、初対面で、とりわけ社会的スキルの高い人と会っている時のほうが大きいという。カモフラージュを行っている女性はいじめなどカモフラージュを行うに至った具体的な過去の経験を持っていることが多いことから、周囲からの同調圧力のプレッシャーを強く感じる可能性があるためカモフラージュをすることで、周囲のネガティブな反応から身を守ることができていると感じているという (Bernardin et al., 2021)。他にも、自分が自閉症であることに恥ずかしさを感じ、自閉的傾向を隠したいという思いからカモフラージュを行うこともあり、本人自身が自閉症に対するスティグマ

を持っているといったことも要因として挙げられている (Cage et al., 2019)。

6. カムフラージュと精神的負担

カムフラージュをすることで、精神的負担がかかることについて言及した先行研究があった。不適切な行動が目立たなくなり、孤立することが減る一方で、カムフラージュすることが精神的にも肉体的にも負担となる (Hull et al., 2017; Hull et al., 2021)。更に、カムフラージュが失敗したり、自分が思うような結果にならなかった場合や自身に対して成功させるようにプレッシャーをかけ続けると、ストレスや不安、うつ病の増加につながる可能性がある (Hull et al., 2017 ; Lai et al., 2017 ; Bernardin et al., 2021)。Beck et al. (2020) では ASD の女性 58 人にメンタルヘルスとカムフラージュについてのアンケートに回答してもらっている。その結果、メンタルヘルスとカムフラージュの関係は、対象者の ASD の症状が重度か軽度かに関係なく関係していた。

また、カムフラージュをすることで友人ができたとしても、疎外感や集団への帰属意識が伴わない場合がある。Cassidy (2019) は 160 人の大学生に対して自閉傾向、うつ程度、不安、カムフラージュの程度、集団からの疎外感について横断的に調査した結果、カムフラージュすることで集団からの疎外感を感じ、自殺傾向につながることを示唆されている。これは、カムフラージュによって成立した関係は嘘をついて成り立っていると考えられるためである。このことから、誰も本当の自分を理解していないと感じ、それゆえに孤立と孤独を強化し、帰属意識が低下する人もいるという (Hull et al., 2017 ; Hull et al., 2021 ; Cassidy et al., 2020)。

IV 考察

本研究では、ASD の女性の中でもカムフラージュを行う人の傾向や、カムフラージュを行いやす

い状況、動機、さらにカムフラージュをすることで感じる負担についての概観した上で現状と課題について考察することを目的とした。

今回の結果では条件に該当した論文が 24 件と少ない結果になった。これは、岩男 (2018) でも述べられているように、ASD の女性の有病率が低いことで焦点が当たりづらかった可能性やカムフラージュという概念自体が最近注目されるようになったためではないかと考えられる。

研究方法としては、カムフラージュを予測する精神的負担や IQ の高さ、認知機能に関して統計解析による量的研究が多かった。カムフラージュの量的測定に関しては、2020 年以前は内的な自閉傾向と外的な行動の観察の不一致度によるものが多かったが、2018 年に CAT-Q が開発されたのちは CAT-Q を使用した研究が大半であった。CAT-Q のようなカムフラージュ程度を測定する尺度が登場したことで、今後量的研究を含めたさらなる展開が期待される。

また、カムフラージュを行う動機に関する研究は、半構造化面接によるインタビューデータに基づいた質的研究が多く見られた。

研究の内容としては、カムフラージュの男女差について述べている論文が多かったが、その一方で ASD の女性は男性に比べて併存症をもつ可能性が高い。カムフラージュを行うことで、外からは社会に適応しているように見えるが、本人の内面ではプレッシャーを感じながら行っており、時には失敗したり失敗に対して過度に不安になっている状態であると考えられる。

また、カムフラージュを行う要因として、性役割期待や同調圧力の中で行っているということが示唆された。このことから援助においては、木谷ら (2020) が述べているように、カムフラージュをする必要がない本当の自分が出せるような場や関係が必要であるといえよう。

今回は日本における研究に関しては取り扱わなかったが日本と海外では文化の違いによりカムフ

ラージュの内容について異なっている可能性もある。例えば、カモフラージュと過剰適応は似ている概念であるが、過剰適応は日本特有の概念である。千田・岡田(2021)の文献レビューによると、2つの概念の類似点としては主に社会や集団の中で生まれる要求に応えようとした結果、不適応や疲労、精神的負担が生まれるという点であるという。相違点としては構成概念の内容が挙げられている。過剰適応では、社会的な動機が含まれていたり、本人の努力が必ずしも対人場面に限定しているわけではないという。一方でカモフラージュでは、対人場面を想定した努力やスキルに限定されているという。このように、今後はカモフラージュの文化差についても目を向ける必要があると考えられる。

文献

- Beck, J. S., Lundwall, R. A., Gabrielsen, T., Cox, J. C., & South, M. (2020). Looking good but feeling bad: “Camouflaging” behaviors and mental health in women with autistic traits. *Autism: the international journal of research and practice*, 24(4), 809–821
- Baron-Cohen, S., Wheelwright, S., Skinner, R., Martin, J., & Clubley, E. (2001). The autism-spectrum quotient (AQ): evidence from Asperger syndrome/high-functioning autism, males and females, scientists and mathematicians. *Journal of autism and developmental disorders*, 31(1), 5–17.
- Bernardin, C. J., Mason, E., Lewis, T., & Kanne, S. (2021). “You Must Become a Chameleon to Survive”: Adolescent Experiences of Camouflaging. *Journal of autism and developmental disorders*, 10.1007/s10803-021-04912-1. Advance online publication.
- Bernardin, C. J., Lewis, T., Bell, D., & Kanne, S. (2021). Associations between social camouflaging and internalizing symptoms in autistic and non-autistic adolescents. *Autism: the international journal of research and practice*, 25(6), 1580–1591.
- Cage, E., & Troxell-Whitman, Z. (2019). Understanding the Reasons, Contexts and Costs of Camouflaging for Autistic Adults. *Journal of autism and developmental disorders*, 49(5), 1899–1911.
- Cassidy, S. A., Gould, K., Townsend, E., Pelton, M., Robertson, A. E., & Rodgers, J. (2020). Is Camouflaging Autistic Traits Associated with Suicidal Thoughts and Behaviours? Expanding the Interpersonal Psychological Theory of Suicide in an Undergraduate Student Sample. *Journal of autism and developmental disorders*, 50(10), 3638–3648.
- Cassidy, S., Bradley, L., Shaw, R., & Baron-Cohen, S. (2018). Risk markers for suicidality in autistic adults. *Molecular autism*, 9, 42.
- Centers for Disease Control and Prevention. (2014). Prevalence of autism spectrum disorder among children aged 8 years: Autism and Developmental Disabilities Monitoring Network, 11 sites, United States, 2010. Morbidity and Mortality Weekly Report. Surveillance Summaries (Washington, DC), 63, 1-21.
- Cola, M. L., Plate, S., Yankowitz, L., Petrulla, V., Bateman, L., Zampella, C. J., ... & Parish-Morris, J. (2020). Sex differences in the first impressions made by girls and boys with autism. *Molecular autism*, 11(1), 1-12.
- Corbett, B. A., Schwartzman, J. M., Libsack, E. J., Muscatello, R. A., Lerner, M. D., Simmons, G. L., & White, S. W. (2021). Camouflaging in Autism: Examining Sex-Based and Compensatory Models in Social Cognition and Communication. *Autism research: official journal of the International Society for Autism Research*, 14(1), 127–142.
- 蜂谷 百合子(2020).女性のASDと女性のASDに併存する精神症状, 医療ニーズ, 慢性疼痛 精神医学, 739, 977-984.
- Halsall, J., Clarke, C., & Crane, L. (2021). “Camouflaging” by adolescent autistic girls who attend both mainstream and specialist resource classes: Perspectives of girls, their mothers and their

- educators. *Autism : the international journal of research and practice*, 25(7), 2074–2086.
- Hull, L., Levy, L., Lai, M. C., Petrides, K. V., Baron-Cohen, S., Allison, C., Smith, P., & Mandy, W. (2021). Is social camouflaging associated with anxiety and depression in autistic adults?. *Molecular autism*, 12(1), 13.
- Hull, L., Petrides, K. V., & Mandy, W. (2021). Cognitive Predictors of Self-Reported Camouflaging in Autistic Adolescents. *Autism research : official journal of the International Society for Autism Research*, 14(3), 523–532.
- Hull, L., Mandy, W., Lai, M. C., Baron-Cohen, S., Allison, C., Smith, P., & Petrides, K. V. (2019). Development and Validation of the Camouflaging Autistic Traits Questionnaire (CAT-Q). *Journal of autism and developmental disorders*, 49(3), 819–833.
- Hull, L., Lai, M. C., Baron-Cohen, S., Allison, C., Smith, P., Petrides, K. V., & Mandy, W. (2020). Gender differences in self-reported camouflaging in autistic and non-autistic adults. *Autism : the international journal of research and practice*, 24(2), 352–363.
- 岩男 英美(2018). わが国における自閉症スペクトラム障害の女性への支援に関する文献的考察. *中村学園大学発達支援センター研究紀要*, (9), 1-8.
- Jedrzejewska, A., & Dewey, J. (2021). Camouflaging in Autistic and Non-autistic Adolescents in the Modern Context of Social Media. *Journal of autism and developmental disorders*, 10.1007/s10803-021-04953-6. Advance online publication.
- 神尾 陽子・森脇 愛子・武井 麗子・稲田 尚子・井口 英子・高橋 秀俊・中鉢 貴行(2013). 未診断自閉症スペクトラム児者の精神医学的問題. *精神神経学雑誌*, 115(6), 601-606.
- 木谷 秀勝・岩男 英美・豊丹生 啓子・土橋 悠加・牛見明日香・飯田潤子 (2020). 青年期の女性 ASD への「自己理解」プログラムにおける変化:「カムフラージュ」から解放される居場所. *教育実践総合センター研究紀要*, (50), 171-180.
- Lai, M. C., Lombardo, M. V., Ruigrok, A. N., Chakrabarti, B., Auyeung, B., Szatmari, P., Happé, F., Baron-Cohen, S., & MRC AIMS Consortium (2017). Quantifying and exploring camouflaging in men and women with autism. *Autism : the international journal of research and practice*, 21(6), 690–702.
- Lai, M. C., Lombardo, M. V., Chakrabarti, B., Ruigrok, A. N., Bullmore, E. T., Suckling, J., Auyeung, B., Happé, F., Szatmari, P., Baron-Cohen, S., & MRC AIMS Consortium (2019). Neural self-representation in autistic women and association with 'compensatorycamouflaging'. *Autism : the international journal of research and practice*, 23(5), 1210–1223.
- Livingston, L. A., Colvert, E., Social Relationships Study Team, Bolton, P., & Happé, F. (2019). Good social skills despite poor theory of mind: exploring compensation in autism spectrum disorder. *Journal of child psychology and psychiatry, and allied disciplines*, 60(1), 102–110.
- Livingston, L. A., Shah, P., Milner, V., & Happé, F. (2020). Quantifying compensatory strategies in adults with and without diagnosed autism. *Molecular autism*, 11(1), 15.
- Lord, C., Rutter, M., & Le Couteur, A. (1994). Autism Diagnostic Interview-Revised: a revised version of a diagnostic interview for caregivers of individuals with possible pervasive developmental disorders. *Journal of autism and developmental disorders*, 24(5), 659-685.
- Lord, C., Rutter, M., DiLavore, P., Risi, S., Gotham, K., & Bishop, S. (2012). Autism diagnostic observation schedule—2nd edition (ADOS-2). *Los Angeles, CA: Western Psychological Corporation*, 284.
- McQuaid, G. A., Lee, N. R., & Wallace, G. L. (2021). Camouflaging in autism spectrum disorder: Examining the roles of sex, gender identity, and diagnostic timing. *Autism : the international journal of research and practice*,

13623613211042131. Advance online publication.

- Parish-Morris, J., Liberman, M. Y., Cieri, C., Herrington, J. D., Yerys, B. E., Bateman, L., Donaher, J., Ferguson, E., Pandey, J., & Schultz, R. T. (2017). Linguistic camouflage in girls with autism spectrum disorder. *Molecular autism, 8*, 48.
- Ratto, A. B., Kenworthy, L., Yerys, B. E., Bascom, J., Wieckowski, A. T., White, S. W., Wallace, G. L., Pugliese, C., Schultz, R. T., Ollendick, T. H., Scarpa, A., Seese, S., Register-Brown, K., Martin, A., & Anthony, L. G. (2018). What About the Girls? Sex-Based Differences in Autistic Traits and Adaptive Skills. *Journal of autism and developmental disorders, 48*(5), 1698–1711.
- Rynkiewicz, A., Schuller, B., Marchi, E., Piana, S., Camurri, A., Lassalle, A., & Baron-Cohen, S. (2016). An investigation of the ‘female camouflage effect in autism using a computerized ADOS-2 and a test of sex/gender differences. *Molecular autism, 7*(1), 1-8.
- 千田 若菜・岡田 智(2021). 自閉スペクトラム症における過剰適応とカモフラージュの臨床的意義. *子ども発達臨床研究, 15*, 57-66.
- Wood-Downie, H., Wong, B., Kovshoff, H., Mandy, W., Hull, L., & Hadwin, J. A. (2021). Sex/Gender Differences in Camouflaging in Children and Belcher Adolescents with Autism. *Journal of autism and developmental disorders, 51*(4), 1353–1364.
- 山内 裕子・宮尾 益知・奥山 眞紀子・井田 博幸. (2013). 女兒 Asperger 障害の臨床的特徴. *脳と発達, 45*(5), 366–370.